

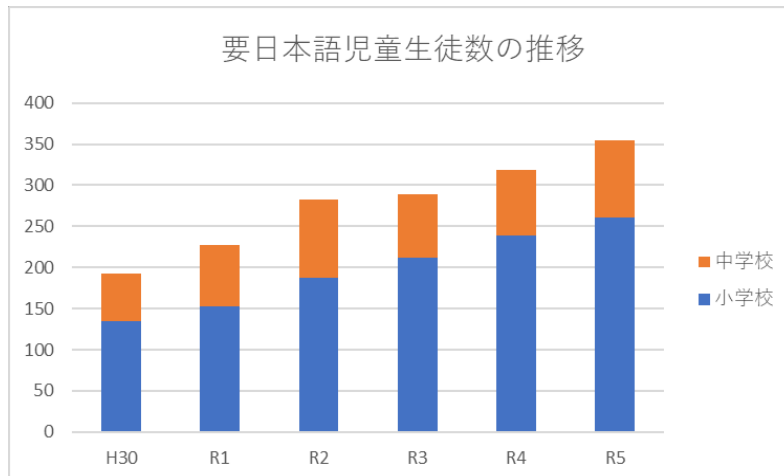
## 外国につながる児童生徒への支援について

教育センター

## 1 最近の特徴

- ・年度途中に入国してくる児童・生徒が多い。
- ・コロナの影響により自国で学校に通わずに、一人で学習していたり、リモートで学習していたりしたため、母語や学習内容の定着が不十分であり、就学ガイダンスに多くの時間を必要とする児童生徒が増えている。
- ・子供が幼少期に、母親が子供を母国に置いて来日し、近年日本に呼び寄せたため、母親の自分の子どもへの理解が浅いケースが複数見られる。
- ・国内で転居を繰り返すケースは、保護者の仕事の都合だけでなく、家族の問題や養育の問題が絡んでいることがある。
- ・幼稚園児が増えており、市内の幼稚園でも子供と保護者の対応に苦慮している。指導のノウハウを学校教育課（教育センター）に問い合わせている。
- ・プレ教室で指導した児童生徒はほとんどが、学校の就学につながっている。（市外へ転出したケース1件あり）

## 2 日本語指導が必要な児童生徒数 経年推移（各年5月1日調べ）



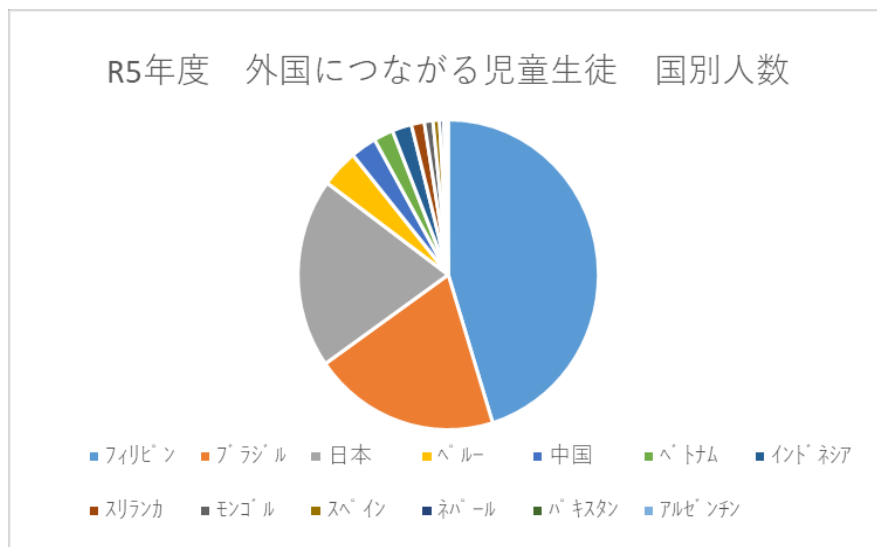
	小学校	中学校	計
H30	135	57	192
R1	153	74	227
R2	188	94	282
R3	212	77	289
R4	239	79	318
R5	261	93	354

## 3 県加配教員数の推移

加配教員	小学校		中学校	
	人数	学校数	人数	学校数
H30	4	3	2	2
R1	4	3	3	3
R2	5	3	3	3
R3	5	3	2	2
R4	6	4	2	2
R5	12	7	3	2

- ・本年度の加配教員は15人と昨年に比べほぼ倍増している。しかし、このうち加配教員として初めて指導に当たる教員が9人いる。
- ・とりわけ4人（焼津東小、豊田小、小川小、和田中）については、勤務校に経験者が誰もいない状態である。
- ・当然、スキルが不足しているため、現時点では十分な初期指導ができない。そのため市のコーディネーターが学校を訪問し、教員にアドバイスしている。

#### 4 外国につながる児童生徒 国別人数 (R5.5.1)



※「外国につながる児童生徒」は日本語指導を必要としない児童生徒を含む。

#### 5 今後に向けて

- ・入国してくる子供たちの母語の定着度や日本語活用能力は様々である。それぞれの子供が抱える課題にふさわしい指導ができる支援員をマッチングさせることは、たいへん高度なスキルと経験を要する。現在教育センターに所属するコーディネーター（1人）は貴重な人材で、なくてはならない存在である。継続した任用や新しいコーディネーターの育成が必要である。
- ・現在、登録している支援員は61人である。特にバイリンガル支援員（16人）は貴重な存在である。焼津市の支援体制を充実させていく上で、人材確保が欠かせない。
- ・入国してくる子供の年齢が低年齢化していることから、就学前の時期の指導がたいへん重要である。子供と共に保護者の支援、教育が重要である。ここに注力することによって、その後の支援がより効果的なものになると考えられる。